

やまとの名品

天理図書館



▲根室における光太夫とロシア使節。画中人物の名札は定信自筆。

ウロシア人物ならびに并小屋内図

紙本着彩 江戸後期写 松平定信旧蔵

縦29.5cm 横74.2cm

いまから二三〇年前の天明二年（一七八二）十二月、船頭の大黒屋光太夫ら十七人の船乗りは、神昌丸しんしょうまるに米や木綿などを積んで伊勢国白子港（現三重県鈴鹿市）から江戸に向かって出帆しゅっばんした。途中、嵐のため神昌丸は遭難し北へ北へと七カ月間漂流。厳しい鎖国の徳川幕府では、国外への航海をさせないよう帆柱を一本としていた為に、漂流する船が多かった。着いた先はアリューシャン列島のアムチトカ島であった。

四年後、光太夫一行と同じく漂流民のロシア人達とが自力で船を作り、カムチャツカに、そして後、オホーツクに渡る。さ

らに帰国許可嘆願たんがんの為、陸路でシベリアを進み、イルクーツクに到着した時には六人になっていた。そこには帰国できない日本の漂流民がすでにおり、ロシア政府は日本語学校を置き、教師として永住させていた。

しかし、光太夫は、博物学者キリル・ラックスマンの協力を得て、首都ペテルブルクの女帝エカテリーナ二世との謁見えつげんがない、帰国を許された。ようやく、生き残った光太夫、小市こいち、磯吉いそきちの三人が帰国することになった。漂流から十年。寛政四年（一七九二）十月、日本との通商を求める為に、光太夫らを送ってキリルの息子のロシア特使

アダム・ラックスマンが北海道根室に着いた。

この時、老中松平定信は、

重大な外交問題に直面することになった。

本図は根室仮設小屋で越冬する光太夫らを描いたもの。右端の人物がアダム・ラックスマン、黒犬の右が光太夫。右カットは、送還したエカテリーナ二世号。日本とロシアの外交史を知る上で貴重な一枚である。

（天理図書館 加藤重光）



天理図書館のお知らせ Tel:0743-63-9200 <http://www.tcl.gr.jp/>
 ◆平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）
 2月29日は休館。
 （本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください）